

人が、街が失われた2011年3月11日の“あの日”。今、ゆっくりと未来へ歩み始めた。被災地の復興に挑む医療者たちの心を届ける

あの日から、未来へ

南相馬市立総合病院
副院長
及川友好氏



1つのアンチテーゼ：南相馬の持続可能性

「1.1.2.3.5.8.13.21.34...」で有名なフィボナッチ数列F(n)にある種の関数(例えば $f(x)=1+x^1+x^2+\dots+x^n$)を組み合わせた母関数($F(x)=F_0x^0+F_1x^1+F_2x^2+\dots+F_nx^n$)を考え、この母関数の解をもとめ、さらに母関数の解を変形すれば、フィボナッチ数列の一般項を導き出せる。

歴史を紐解くと、意識的か無意識的かは別として、このような数学的手法の一部(中途半端な使い方)が社会的問題解決(問題のすり替え)に使われてきた。昨今では大飯原子力発電所の再稼働問題がその典型例である。フィボナッチ数列に当てはめると、数列「原発の安全性」+関数「夏場の安定電力供給」から母関数「原発の必要性」を導きだし、母関数の解「大飯原子力発電所再稼働やむを得ず」という解を導き出している。しかし、これはあくまで母関数の解であって、目的の解、すなわち本当に必要な「原発の安全性」の答えでは決してない。この論法は「原発の安全性」を十分検討しないで、国民に原発再稼働を甘受させる悪質な政治手法と言わざるを得ない。本来、原発の安全性を議論する際は、純粋に科学的な考察が行われなければならない。

福島第一原子力発電所の爆発事故以来、すでに2年が過ぎた。一時期のヒステリックな不安や怒りは、表面上収まりつつある。地産地消の食生活をやめることで、内部被曝は避けられることを知り、完全に除染ができないならば、汚染地域を避けた生活が重要と理解されはじめている。また、幸いにも現時点の外部被曝、内部被曝がほとんど健康に害を及ぼさず、喫煙のほうが遙かに健康被害を及ぼすことを、市民は理解しはじめている。

しかし、いくら市民の気持ちが落ち着いたとは言っても、1度壊れた地域社会はそう簡単に戻らない。街の外観の移り変わりとは裏腹に、風評により刻まれた心の中の烙印は容易に消えるものではなく、未だに被災地を全く理解していない著名人の言動が後を絶たない。これでは、いくら正しい放射線の知識が蓄積され、

社会基盤が整備されても、帰郷には結びつかない。また、かつては1つであった「復興」「帰郷」に対する思いは各人異なり、単一の価値観を唱えるだけでは、復興も、帰郷、家族の再会も成し得なくなった。

南相馬市にはさまざまな思いを胸に、この地に生きることを決断した市民が4万8000人にもものぼる。すなわち、一時期9000人程度まで減少した居住人口は、震災前の67%まで戻っている(居住人口 図1、年齢別居住人口 図2)。これらの数字をどう解釈するか。日本のみならず世界の人々に考えてもらいたい。原発事故による地域社会の崩壊は南相馬の地域社会の問題ではなく、日本の、世界の問題である。もう1度、全ての人が原発事故による地域社会の崩壊を問い直す時期だと思う。

東日本大震災による福島第一原子力発電所事故は、忘れ去られていい出来事ではない。福島第一原子力発電所から23キロ地点で生と職を営む私も、この地域で生きることを決断した1人であるが、「今後、原発は再度爆発することはないのか?」という根本的な疑問が頭から離れない。この不安は、私が生を全うするまで付きまとうであろう。また、原発事故を間近に経験したものとして、「持続可能な社会は存在しない」というテーゼと「真の復興には持続可能な社会が必要」というアンチテーゼ、すなわち「社会のsustainability(持続可能性)」という問題に真正面から向き合わざるを得ない。これらの思考の中から次世代に残す社会の姿を模索できないかと常々考えている。医療者といえども、社会との関わりから離れては暮らしていけない。

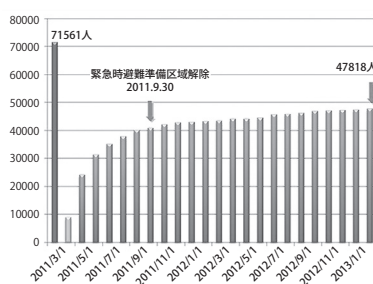


図1) 震災前後の南相馬市居住人口比較

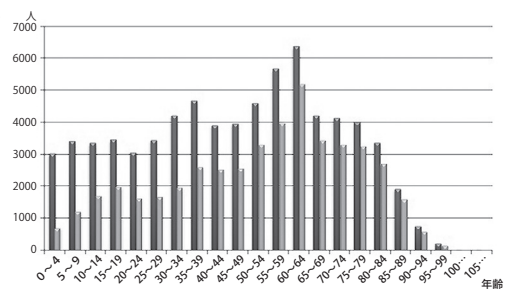


図2) 年齢別居住人口